

体験型鑑賞教育の研究

— ブルネレスキ作とギベルティ作のレリーフの教材としての価値 —

緒方 信行*

A study on the experiential appreciation education
— About the value as the teaching materials of the reliefs
of Brunelleschi product and Ghiberti product —

Nobuyuki OGATA

(Received October 5, 2017)



図1 ブルネレスキのレリーフ



図2 ギベルティのレリーフ

1 はじめに

体験型鑑賞教育の一つの教材として『ルネサンスのライバルI ブルネレスキとギベルティ』を開発した。本稿ではその教材が対象とするブルネレスキ作とギベルティ作の2つのレリーフ《イサクの犠牲》(図1・2)について、その教材としての価値について考察する。

体験型鑑賞教育とは、子ども達が制作者や審査員、学芸員などの立場になるなどして、具体的な視点から美術作品に対峙していく体験を通して、美術的諸能力を高めていく美術鑑賞授業法である。具体的には、生徒・児童による石庭や生け花、ルネサンス期初頭にあった実際のコンクールなどの再現活動を通して、美術対象がどのような要素で構築されているのかを探ることにある。加えて個々の美的価値意識の交流を通じ、集団による美術作品が持つ意味への関心度の育成を促すことを目的としている。

本稿における体験型鑑賞授業『ルネサンスのライバルI ブルネレスキとギベルティ』は、1401年のイタリア、フィレンツェにおけるサンジョバンニ洗礼堂の門扉を飾るレリーフの制作者を決定するためのコンクールをもとにした教材である。コンクールの最終選考に残ったのがフィリッポ・ブルネレスキ¹⁾と、ロレンツォ・ギベルティ²⁾の2人である。この授業において、子ども達は審査員となって、改めて最終選考に残った2人の作品を再審査する。

二つのレリーフはどちらも優劣つけがたいとされたが、歴史上の事実として栄冠はギベルティに与えられる。勝因は文献によりまちまちで、技術の高さとブロンズ代の安価さによりギベルティという説があれば、2人ともに最優秀で共同制作となったが、ブルネレスキ自らが断ったという説もある。多くの文献を見ても、その他の重大で決定的な要因は見つけられない。疑惑の残るコンクールであり、その分、過去の人間達に対していろんな思惑を抱かせる余裕を持っていることになる。

果たして子ども達はどちらのレリーフを選ぶので

* 熊本大学教育学部美術科

あろうか。時代性やその他の要因としての資料を掲げながら、授業という形ではあるが、この結末の疑わしいコンクールを子ども達に再現してもらおう。

なお今回、本稿では授業自体に研究の中心を置くのではなく、コンクールのテーマとなった「イサクの犠牲」を表現した2人のレリーフ作品自体に注目する。画面構成や立体としての奥行き感、さらに子ども達の志向や評価をもとに、ブルネレスキ作とギベルティ作の2つのレリーフについて、体験型鑑賞教材としての有用性や価値を探っていく。

2 二つのレリーフについて

二つのレリーフがなぜ制作されたのか、ここでは、その経緯について紹介するとともに、この二つのレリーフの、体験型鑑賞教育の教材としての有用性について提案する。

1) 二つのレリーフの成立

ブルネレスキとギベルティの二人が勝敗を決することになったコンクールは、イタリアルネサンスが始まろうとする正にその時の1401年に、サンジョバンニ洗礼堂の門扉のレリーフの作者選定をめぐる、フィレンツェ毛織物組合により開催された。およそ10年毎に起きるペストの流行を治め癒やすためにと実施されたのである。

そのコンクールの課題として出されたテーマが「イサクの犠牲」である。この課題は、旧約聖書「創世記」22章に基づいており、その内容を要約すると以下のとおりである。

神は忠誠心を試すために、愛する独り子イサクを生け贄に出すよう100歳になるアブラハムに命じる。彼はその命に従いイサクを召使いととも山に連れて行き祭壇を築き、息子イサクを縛って壇上に載せ、刃物でその命を奪おうとする。その時、アブラハムの信心深さを確認した神の御使いが現れ、アブラハムのその瞬間を止めに入り、イサクの命は絶たれずにすむ。

最終選考に残ったのがブルネレスキとギベルティの二人である。どちらの作品も課題「イサクの犠牲」のテーマに迫り、優劣つけがたいとされた。結果、栄冠はギベルティに与えられるが、前項で紹介したように、勝因は文献によりまちまちで、技術の高さとブロンズ代の安価さによりギベルティという説があれば、二人ともに最優秀で共同制作ということになったが、ブルネレスキが断ったという説もある。

後者の説は、ルネサンスの著名な芸術家を紹介するジョルジョ・バザーリ³⁾によってその著書『画家・彫刻家・建築家列伝』に、明確に記されている⁴⁾。それはブルネレスキと、当時これも有名な彫刻家ドナテッロの二人によって語られたこととして紹介されている。これに対して、ギベルティは、はっきりと自分一人が選ばれたと、自叙伝『コメンタリイ』にて述べている⁵⁾ ようだが、バザーリの著書はイタリアルネサンス当時の芸術家を著す資料として名高いものであり、それによる紹介は後の世にも強い影響力を持ち、佐々木英也が監修した『NHKフィレンツェ・ルネサンス2 美と人間の革新』でもバザーリの主張を強く押している⁶⁾。他の文献を見ても、大方バザーリの主張を踏襲しているが、どちらが正しいのか、その他の重大で決定的な要因は見つけられない。

2) 二つのレリーフの教材としての有用性

ここまで、二つのレリーフの成立について述べ、作者であるブルネレスキとギベルティの立ち位置についても紹介してきた。バザーリの著書が如何にそれ以降の時代に影響しているか、第三者が語る人物記録としてしっかり残っているところにその重みがある。しかし、バザーリはこのコンクールの110年後に生まれた人物である。そして、著書『画家・彫刻家・建築家列伝』は1555年に出版されたものであり、彼らの死後100年、コンクールからは150年ほど経って記されたことになる。フィレンツェ大聖堂の円蓋を建築し、透視図法の生みの親⁷⁾と呼ばれるようになったブルネレスキが、当時の人々から崇拜され、その語る言葉が優位となり、それ以降の時代の中で、さらに美化され真実化されていった可能性はないとは言えないのである。

さて、史実がどうであったのかを追究することは他研究者に任せることとして、美的構成面から改めて二人の作品について対峙し、美的要素から再検討して自分なりの評価を出すことは、研究者や芸術作家にとってもたいへん意味あることと考える。果たして最優秀はギベルティなのか、ブルネレスキなのか、再審査という形で2つの作品を、文献等のしがらみに関係なく自由に評価することが可能になってくると考える。このことは芸術家ばかりでなく一般鑑賞者などにとっても興味あることであり、中学生など子ども達にとっても自由に評価のできる面白味のある鑑賞教材になると考える。

実際、当時のコンクールにおける実質的な審査員は、市民達であったと言われる。その頃の風潮として、芸術に関する豊かな素養と的確公平な鑑識眼を

持つことが市民の重要な素質とされ、芸術家の力量は市民の判断に委ねられていた⁸⁾のである。このことから、一般鑑賞者が芸術作品を評価したり、中学生など子ども達が美術に関心を持ち、作品をよく見つめながら評価をしようとする行為は、自分自身の素養を高めるためにも有意義なことと考える。また、審査員となって改めてコンクールの再審査を行うというこの教材のように、体験型鑑賞教育というものが、美術教育において重要な役割を果たす一つの方法に成り得ると考える。



図3 吉田授業

3 二つのレリーフの教材としての価値

ブルネレスキとギベルティによる二つのレリーフが、体験型鑑賞教育の教材としてどのような価値を有するのだろうか。具体的な指向性を知るためには、授業を実践してデータを収集しなければならない。まずは中学生に対して授業を行い、その展開の初発の第一印象としての好みを調査する。次いで、レリーフの持つ美術的内容を授業の展開の中で紹介して子ども達にしっかりと作品の構成を見つめさせる機会を与える。その上で、最終的に子ども達が下す評価をもとに、二つのレリーフの教材としての価値に迫って行く。

1) 中学生の二つのレリーフに対する初発評価

さて、授業『ルネサンスのライバル1 ブルネレスキとギベルティ』は、以下(1)、(2)のような展開で実施される体験型鑑賞教育の授業である。なおこの授業は、2004年に筆者が熊本大学教育学部附属中学校で開発した授業⁹⁾であり、同年、9月18日に附属中学校の研究発表会でも公開授業として実践発表した。この授業をもとに、2016年に南関町立南関中学校の吉田香寿美教諭¹⁰⁾が展開を再構築し授業実践した。以降、前者の授業を「緒方授業」、後者を「吉田授業」と表記する。

(1) 「吉田授業」の展開

「吉田授業」の特徴は、作品を評価するにあたり、③情報提供において、「テーマ」と「構成」からの観点を具体的に示したところにある。

- ① 二つのレリーフの紹介 5'
 - ・ずっと前に実際にあったコンクール
 - ・今日は、君たちで改めての再審査
- ② 各自での初発の評価 5'
 - ・審査委員になりきって

- ・気づきを出し合いながら

- ③ 情報提供 15'
 - ・2人の作者名の紹介
 - ・なぜ、コンクールが行われたのか
 - ・コンクールの概要
 - ・作品を奥行きでとらえたら
 - ・観点をもとに評価
 - a ; イサクの犠牲のテーマをより表現できていたのはどちらだと感じますか？（動き、人物の表現に着目すると…）
 - b ; 構図が格好いいと感じるのはどちらですか？また、どんなところがよいと感じますか？
- ④ 情報を知った上での最終評価 15'
 - ・班での話し合い
 - ・自分の意見が変わったら朱書きで変更
- ⑤ 意見発表 5'
- ⑥ 教師の意見、その後の二人について 5'

(2) 「緒方授業」の展開

この授業が元々開発したオリジナルの授業である。特徴は、③⑥で映像資料を使用したり、具体的な奥行き模型を作成して提示したりしたことにある。できる限り、手作りということにこだわって、他教師も使えるような教材となるよう、使い勝手のよい授業セットを考えた。

- ① 二つのレリーフの紹介 3'
 - ・実際にあったコンクール
 - ・今日は、コンクールの再検証
- ② 各自および班での初発の評価 4'



図4 緒方授業

- ・どちらが選ばれたらどうか
- ・実際の審査結果は後ほど

③ 情報提供 15'

- ・なぜ、コンクールが行われたのか
- ・コンクールの概要
- ・当時の美術表現の特徴と前後の変遷

④ 情報を知った上での途中評価 15'

- ・班での話し合い

⑤ 意見発表 3'

⑥ 教師の意見、その後の二人について 10'

- ・当時の審査結果の発表
- ・作品を立体的に想像して横から見たら
- ・感想と最終個人判定

さて、両授業の展開②における子ども達の初発の評価は次の通りであった。

2016年南関中学校 3年生A組 25名

- ブルネレスキ派；21名
- ギベルティー派；4名

2004年 附属中学校 3年生B組 25名

- ブルネレスキ派；34名
- ギベルティー派；7名

中学生にブルネレスキとギベルティーの二つのレリーフを提示すれば、子ども達の初発評価は、圧倒的に迫力あるブルネレスキの作品に偏る傾向を示した。

2) 二つのレリーフの絵画的構成について

レリーフは日本語では「浮き彫り」と称され、絵画的な要素が強い半立体の彫刻表現の作品である。ここでは、ブルネレスキとギベルティーの作品についてその形状を紹介する。ともに大きさ¹¹⁾は、縦45cm、横40cm、ブロンズ仕上げで、作品はイタリアのフィレンツェ、バルジェロ美術館に二つ並べて展示されている。



図5 バルジェロ美術館での展示

ここでは、二人のレリーフを絵画的な構成としてとらえてみよう。



図6

ブルネレスキの作品は全体的に、上下と左右がそれぞれに対称的な配置で表されていると言える。中央の横軸は型枠としての四つ葉模様の菱形の左右の頂点とイサクが乗る台の上辺により上下に分けられ、さらに上半分は三分の二のところ、風になびくアブラハムのマントと天使の左腕などが作り出す線で画面が横切られている。下半分も同じでロバの背が作り出す線とロバの腹部が作る線の2本で分断されているように見える。また、左右は四つ葉模様の型枠の菱形の上下の頂点を結ぶ線により、真半分で構成物が右と左で線対称的に配置されている。

しかし、主題であるイサクとアブラハムが中央に配されて、正にイサクを刺そうとする短剣、正にその手を止めようとする天使の手など迫力ある雰囲気を作り出しており、この点に関して子ども達は特に好感を抱き、ブルネレスキの作品の方を推す理由となっている。



図7

ギベルティーの作品は、アブラハムを画面の中央寄りに配しながらも、イサクとともに画面の右半分に配置されている。ギベルティーの画面構成はどちらかと言えば左上から右下方向へと向かう斜めの山の稜線で分けられている。一点透視図法的な画面配置ではあるが、ブルネレスキの作品ほどのダイナミズムは感じられない。しかし、絵画的な構成とはいえ、十分に奥行き感を感じさせ、ロバと召使いの居る場面から、山の稜線がつくる斜線を軸に、回転しながら奥の主題場面の方へと展開させるような動きを感じさせる。そしてさらに、天使や羊の居るずっと奥の方へと意識を移動させるのである。また、細部にわたる丁寧な制作は、繊細な印象を感じさせ、その全体的な仕上げの良さに、観るものの心の内に好感的態度を抱かせるようである。

3) 二つのレリーフの立体的構成について

次に、ブルネレスキとギベルティーのレリーフを立体的構成の面から見てみよう。もちろんレリーフは半立体で肉厚があるものとは言え実際上の奥行きには限りがあり、平面としての絵画的要素で補われているので、奥行きは絵画的な構成から想像しながら判断するしかない。

ブルネレスキのレリーフは、上記2)の絵画的構成で述べたとおり、大きく2場面から成り立っている。そして、その2場面のそれぞれは横並びで平面的配置となっている。模型で表せば次の写真のよう



図8

になり、実に平面的で単調な立体構成であると表現せざるを得ない。

それに対して、ギベルティーのレリーフは、手前の召使いやロバ達から、崖、アブラハム、イサク、天使、羊というようにだんだんと奥行きを感じさせる構成であり、その奥行きを模型にすると次の写真のようにかなりの距離感を想像することができる。

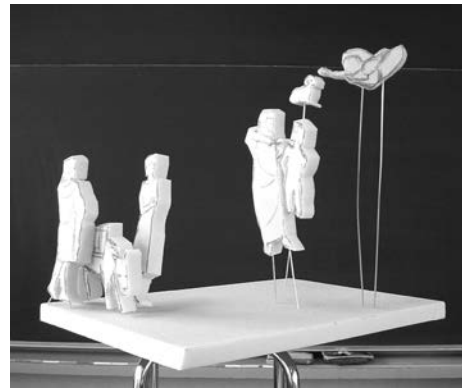


図9

さらに、フィレンツェのバルジェロ美術館に展示してある実物を見れば、ギベルティーのレリーフの方がかなり厚い肉づけで表現されている。左方向から見た図10や、右方向から見た図11の写真からは判断しにくいですが、展示されている実物を実際に見ると、ギベルティーのレリーフの方が、肉付きの厚さを十分



図10

図11

に感じさせて、鑑賞者に対してより奥行き感のある印象を与える。

4) 当時の流行, スタイル

では、当時の美術表現における様式はどのような変化を見せていたのでしょうか。1401年頃はちょうど、ゴシックからルネサンスへと移行する節目に位置する。絵画は写実性が明確になってきており、奥行きをどのように表現するかという課題を解決しようとする動きがある。ルネサンス時代になって一点透視図法が生み出されるが、画家たちは透視図法による表現に執着を見せ始め、彫刻についても写実性を増しながら、ドナテッロ¹²⁾などの時代へと移っていく。時代は正に、写実性や透視図法的遠近感を求める表現の時代へと向かっているのである。

その渦中にありながら、ブルネレスキのレリーフは、一つ一つの部品が区分けされるように平面的に配置され、おそらく、アブラハムの背中から見たら、イサクも天使もそして羊さえも見えないであろう。そのような平面的処理を施してしまった。前述したとおり、ブルネレスキの構成では、召使いとロバ達がいる場面と、イサクやアブラハム、天使がいる場面の二つの平面的横並び構成で組み立てられており実に簡単な組立と言わざるを得ない。たとえ、テーマがドラマチックに表現されていると言えども、最終的には単調で変化に乏しい、説明的で飽きのくるような印象を鑑賞者に与えてしまうことになる。

それに対して、ギベルティーのレリーフは、奥行き配置が十分に考慮されており、ロバや召使い、崖、アブラハム、イサク、天使、羊の順で奥へ奥へと見せていく構成がなされている。正に本格的イタリアルネサンスに続く、透視図法的画面構成が取り入れられている作品であり、時代が求める遠近法をかなえた作品となっている。

1401年、時代は奥行きや写実観を大切にしようとしてきたゴシック時代から、さらに確実な透視図法や真実味のある写実性を取り入れていこうとする本格的ルネサンスの時代へと移行しようとしていたのである。この時点で旧態依然としたブルネレスキの作品よりも遠近感がありより写実的で繊細な表現を見せるギベルティーのレリーフの方が、コンクールで選ばれたのは、時代の流れからすれば当然のことと考えられる。

5) 授業における子ども達の変化と感想

授業の初発で、子ども達の多くが迫力あるブルネレスキの作品の方を選んだ。そして、授業を受けた後の結果は以下の通りである。

2016年南関中学校 3年生A組 25名

南関 A組	初発	最終
ブルネレスキ	21	14
ギベルティ	4	11

2004年附属中学校 3年生B組 41名

附中 B組	初発	最終
ブルネレスキ	34	21
ギベルティ	7	20

最終的には拮抗してくる傾向があるが、これは教師が当時の表現スタイルの展開の説明や、二つのレリーフを立体的に想像して、「もし、作品がつくる場面を横から見たとしたら」という投げかけに、子ども達の心が揺らぎ反応したものだと思われる。具体的に、「緒方授業」では、先ほどの図8・9の写真のような模型で示し、「吉田授業」では次のようなイラストを用いて具体的に示した。この過程を通して、子ども達はさらに詳しく作品に対峙し、自分なりの追究を深めようとする。

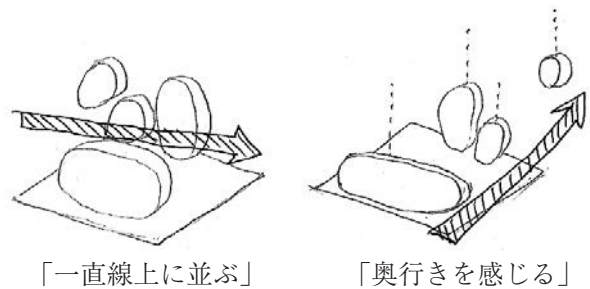


図12

4 考察

実はもう一校、大学4年生の一般協力校での教育実習の折に本授業を実施してもらった。体験型鑑賞教育における授業は、「誰でも、いつでも、どこでも」ということを大切な課題の一つとして考えているからである。これまでにも、開発した授業を教育実習生に実践してもらったが、今回も本授業の教材としての価値判断をより高めるために検証してもらうこととした。熊本市立桜木中学校の3年生に対し、大学4年生である教育実習生¹³⁾が本授業に挑戦した。なお、この授業を「学生実習授業」と記すことにする。

次のような結果となった。

2016年桜木中学校 3年生C組 29名

桜木 C組	初発	最終
ブルネレスキ	17	22
ギベルティ	12	6(?1)

ここでは、初発の両作品への志向は五分五分という割合になった。一般的にはブルネレスキのドラマチックな表現に惹かれる者が多いとしていたが、初めから好みは半々となる可能性もあることを示している。

さて、「学生実習授業」は「吉田授業」をもとにしている。「吉田授業」の特徴は審査において、前述3の1)の(1)~③で紹介したとおり、評価の観点を明確に提示した点にある。ここに改めて、ワークシートの表記を記す。

※次の視点に注目して審査をしてみよう。

- a : イサクの犠牲のテーマをより表現できていたのはどちらだと感じますか？
(動き、人物の表現に着目すると…)
- b : 構図が格好いいと感じるのはどちらですか？
どんなところがよいと感じますか？

「吉田授業」では、この後に図12のイラストを用いてギベルティの「奥行き感」を紹介し、その後、最終審査という展開をとったが、「学生実習授業」では、「緒方授業」の奥行きモデルを紹介したものの、それが最終審査後となり、奥行きモデル紹介後の感想はワークシートの記録に残っていなかった。

すなわち、最終審査前に、二つのレリーフの奥行き感、遠近感を具体的にイメージさせているかどうかで、再審査の結果は変わるということになる。

そこで実際、審査の観点でブルネレスキ寄りと思われる観点①と、ギベルティ寄りになるだろうと思われる観点②へのそれぞれへの得票結果を調査してみた。観点①と②で最終評価の予測が出来ないものかと考えたからである。果たして結果は以下の表のとおりであった。

桜木 C組	観点①	観点②
ブルネレスキ	24	16
ギベルティ	5	13

「学生実習授業」では、最終審査の後に「奥行き模型」を子ども達に提示しているが、観点②の判断動向からすると、最終審査前に「奥行き模型」を提示していたとすれば、ギベルティの作品に票がかなり上積みされたことは予測するに難くない。

つまり、今回の二つのレリーフの教材としての検証について、テーマの表現で判断するならば、優秀なのはブルネレスキの作品であり、美的構成などで評価するならば、優れているのはギベルティの作品であるという結果を表している。

美術鑑賞で大切なことは何であろう。テーマに迫っていれば、美的要素はどうでもよいのであろうか。今回の二つの作品は、そのような価値に迫ることのできる教材でもあると判断できる。

5 おわりに

今回は教材としての価値に着目した。ブルネレスキとギベルティの二つのレリーフを比較することで、授業を組立ててその結果から、その教材の価値に迫っていった。この二つのレリーフは鑑賞者達の判断を二分し、個々の思考においても五分五分の評価を感じさせ、実に有用性のある教材であることが確認された。次は、授業自体に着目して授業全体での取り組みとしての研究を行い、体験型鑑賞授業『ルネサンスのライバル1 ブルネレスキとギベルティ』を詳しく紹介したい。

授業において、教材の選定は大切である。今回取り上げたブルネレスキ作とギベルティ作の二つのレリーフのように、学習者の興味関心を惹く教材の開発に、さらに精進していきたい。

図版典拠

- 図1・2 『イタリアルネサンスの巨匠たち7 ブルネレスキ』, p.7
- 図3・4 授業研究協力者による撮影
- 図5 現地撮影
- 図6・7 図1・2に同じ
- 図8・9 筆者撮影
- 図10・11 現地撮影
- 図12 吉田香寿美教諭手描き

注

- 1) フィリッポ・ブルネレスキ (Filippo Brunelleschi : 1377-1446) イタリアの建築家、彫刻家。フィレンツェ大聖堂の大円蓋を建築。
- 2) ロレンツォ・ギベルティ (Lorenzo Ghiberti : 1378頃-1455) イタリアの金工家、建築家、彫刻家。
- 3) ジョルジョ・ヴァザーリ (Giorgio Vasari : 1511-1574) イタリアの画家、建築家、文筆家。著書『画家・彫刻家・建築家列伝』は、イタリアルネサンス研究の重要資料と

- なっている。
- 4) 『ルネサンス彫刻家建築家列伝』 p. 453
 - 5) 『世界彫刻全集 8 ルネッサン』 p. 160
 - 6) 『NHKフィレンツェ・ルネサンス 2 美と人間の革新』 p. 11, 35
 - 7) 『新潮世界美術辞典』
 - 8) 『NHKフィレンツェ・ルネサンス 2 美と人間の革新』 p. 10
 - 9) 附属中学校美術科教諭時代の2004年に開発, 実践. 附属中学校は各学年4クラスで一クラスは原則40名.
 - 10) 2016年度まで熊本県玉郡南関町立南関中学校教諭, 美術科教諭. 南関中学校は各学年3クラスで一クラスはおおよそ25名.
 - 11) 大きさについては「NHKフィレンツェ・ルネサンス 2」 p. 7, p. 8を参照した. なお, 二つのレリーフの寸法については, 文献によりまちまちでやや異なって表記されている.
 - 12) ドナテッロ (Donatello; 1382-1466) イタリアの彫刻家, ブルネレスキとも交友が深い.
 - 13) 当時大学4年生の美術科学生岩間美咲希が実践. 桜木中学校は各学年4クラスで一クラスはおおよそ30名.

- ・ジョゼフ・マンカ他, 初山昌夫訳, 2009, 世界の彫刻 1000の偉業, 二玄社.
- ・後藤茂樹編集, 1975, 世界彫刻全集 8 ルネッサンス, 小学館.
- ・バルジェロ美術館, 2014, MUSEO NAZIONALE DEL Bargello THE OFFICIAL GUIDE ENGLISH, バルジェロ美術館.
- ・吉川登, 2011, 「行為としての鑑賞」再考—鑑賞学の基礎理論の再検討—, 美術科教育学会誌「美術教育学」, 第32号, 441-452.
- ・緒方信行, ルネサンスのライバル 1 ブルネレスキとギベルティ, 2004, 平成16年度研究発表会—授業案集, 熊本大学教育学部附属中学校.
- ・緒方信行, 授業をつくる ~50分間のプロデュース~, 2005, 平成16年度実践集録 響き, 熊本大学教育学部附属中学校, 81-88.
- ・緒方信行, 体験型鑑賞教育の研究 —鑑賞授業「石庭をつくる」をもとに—, 2015, 熊本大学教育学部研究紀要, 64, 205-212.
- ・緒方信行, 体験型鑑賞教育の研究 —鑑賞授業教具「石庭授業セット」について—, 2016, 熊本大学教育実践研究, 33, 87-94.

参考文献

- ・吉川逸治他, 1985年, 新潮世界美術辞典, 新潮社.
- ・ジョルジョ・ヴァザーリ, 森田義之監訳, 2009, ルネサンス彫刻家建築家列伝, 白水社.
- ・佐々木英也監修, 1991, NHKフィレンツェ・ルネサンス 2 美と人間の革新, 日本放送出版協会.
- ・ジョヴァンニ・ファネッリ, 児嶋由枝訳, 1994, イタリアルネサンスの巨匠たち 7 ブルネレスキ, 東京書籍.
- ・メアリー・ジェーン・オピー, 西嶋憲正訳, 1996, ビジュアル美術館13 彫刻入門, 同朋舎出版.

附記

研究協力者として実践授業をしていただいた吉田香寿美教諭, そして授業実践の場を与えていただいた南関町立南関中学校の, その多大なるご配慮とご協力のご高配には, ここに深く感謝申し上げます.

なお, 本稿は平成27年度科学研究費基盤研究 (C) 「体験型鑑賞教育プログラムの開発と実践・評価」(課題番号15K04451, 研究代表者: 緒方信行) としての研究成果の一部です.